古代イタリア・ローマにおける
アエネアス伝説の受容と展開*

平　田　隆　一

目次

Ⅰ）問題の所在
Ⅱ）エトルリアへの伝播
Ⅲ）ラティウムにおける受容と変容
Ⅳ）ローマによる採択
Ⅴ）ローマのトロイア起源説とギリシア世界
Ⅵ）結論・展望

Ⅰ）問題の所在

1）伝承

ホメロスの『イリアス』や『オデュセイア』等のギリシアの伝承によると、紀元前 13 ないし 12 世紀にアカイア人（これは当時のギリシア人と考えられた）の襲撃にあってトロイア王国は陥落しました。この時、炎上する町から逃れ出た一人のトロイア人がおりました。ギリシア語でアイネイアス（Aineias）と呼ばれるこの男 — 以下ではそのラテン語の呼び名アエネアス（Aeneas）を使います — は、愛の女神アフロディーテーとアンキセスという人間の間に生まれた子供であり（ギリシアではこのような人間を herōs「英雄」と称します)、ヘクトルに次ぐトロイアの武将でした。アエネアスは母親である女神から、落城したトロイアを逃れて海外に新しい国を建設せよ、という使命を授けられました。そこで彼は年老いた父親を背負い、妻と息子のアスカニオス（以下ラテン名のアスカニウスを使う）を連れ、部下たちとともに無事トロイアを脱出しました、ただし妻は途中で行方不明になりましたが。

彼らのその後の活動について、ホメロス以後のギリシアの伝承では、アエネアスはエーゲ海地方の幾つかのギリシアポリスを創建した英雄とされます。イタリアでは、シチリアのセゲスタ等がトロイア人によって建てられたという伝承があり、またカンパニアやエトルリアでは、祖国を脱出するアエネアス像（図版３，４）が作成されています。

他方ローマの歴史家リウィウスや詩人ウェルギリス等は次のように物語っております。即ち、アエネアスは永い放浪の後、イタリアのラティウム地方に上陸し、ここで都市を建

---

* 本稿は 2009 年 12 月 26 日行った最終講義の原稿を活字化したものである。

て、現地で結婚した妻の名に因んでラウィニウムと名付けました（地図参照）。エトルリアのカエレという都市の王メゼンティウスがラティウムに侵入してきた時、アエネアスまたは息子のアスカニウスが、メゼンティウスと戦ってこれを破りました。その後アスカニウスは、アルバ・ロンガという町を建設し王として統治しました。数百年後この王家からロムルスとレムスという双子が生まれ、やがてロムルスがローマの町を築きました。こうしてローマの歴史はアエネアスまでに遡ることになります。

前１世紀の中頃、アエネアスはユーリウス氏の始祖であるとする主張がユーリウス・カエサルによって確定・強化され、初代のローマ皇帝アウグストゥスによって強調・誇示されました。こうしてトロイアはローマ帝国の祖国であり、アエネアスはローマ皇帝の祖先として崇拝されるに至りました。またウェルギリウスは、アエネアスがトロイアを脱出してラティウムに定着するまでの波瀾万丈の冒険を六歩格の叙事詩『アエネイス』で物語り、このローマの国民的叙事詩は、中世・近代に至るまで西ヨーロッパ各国に多大の影響を与えたのです。

２）諸学説と問題点

ローマのトロイア起源に関する以上のような伝承は、何時、どこからローマに入り、アエネアスがローマの始祖とされたのでしょうか。この問題については、文献史料や考古学史料を基に諸説が対立しております。即ち、アエネアス伝説をイタリアにもたらした民族は、①ギリシア人であるとする説、②エトルスキであるとする説、③ラテン人であるとする説、④この伝説をギリシア人とローマ人の合作とする説です。

①ギリシア人説を提唱するペレ（Perret）によれば、トロイアの崩壊は人類史上最も重要な出来事の一つ、従ってこの歴史の全ての結果を説明するのに最適な出来事である、とする考えは、前４世紀からギリシアで発展しました。そしてギリシア人は、トロイア戦争はバルバロイに対するギリシア人の最初の戦いであり、前３世紀初頭にローマと対戦したエペイロスの王ピュロスをアキレウスと見立てて、ローマ人をトロイア人の子孫と見なした、というのです。

②エトルスキ説はその論拠として、前６世紀末ないし５世紀初頭に編年されるエトルリア出土の彫像やスカラベ、壺絵など（図版２，３，４）に、父親を背負い子供を連れたアエネアスの姿が描かれていることを挙げます。アルフェルディ (Alföldi) によれば、小アジア出身のエトルスキ人はそこからアエネアス伝説を初めてエトルリアにもたらしローマに伝え、ローマがこの伝説を受け容れた要因は、このトロイアの英雄がローマ最高の徳と見なされる pietas を体現した人物だったからです。pietas とは、国に対する忠義心、親に対する孝行心、神々を敬う信仰心を全て含む共和政ローマ独自の概念です。一方ベーマー（Bömer）によれば、エトルスキはシチリアのセゲスタからアエネアス伝説を受け容れたのです。そもそもエトルスキ人はトロイア人だったという説も提唱されました。

③カスタニョーリ（Castagnoli）の主張するラテン人説によれば、アエネアス伝説はラ

ティウムで前 600 年頃には知られており、イタリアの幾つかの場所で発見されたミケーネの陶器は、トロイア陥落後にその難民がラティウムに到着した証拠となります。またラウィニウムでは前 6 世紀半ばに編年される聖域で 13 基の祭壇が発見され、さらに前 4 世紀最後の 25 年に編年されアエネアスを祭ったと鑑定される礼拝堂が発掘されていて、この地がアエネアス崇拝の中心地だったことは明白です。従ってアエネアス伝説はエトルスキを通さずに、最初ラティウムで形成された、というのです。

④合作説は最近アースキン（Erskine）が提唱したもので、彼によれば、ギリシア諸ポリスにおけるトロイア戦争およびアエネアス伝説の取り扱いは、トロイア人をバルバロイと見なすものからアエネアスを自国の創建の祖と認めるものまで様々あります。トロイア起源を標榜するローマ人がギリシア世界に進出するようになった時、同じくアエネアスの末裔であると主張する若干のギリシアポリスは、祖先を共有する同胞としてローマに働きかけて有利な処遇を期待しました。従ってローマのトロイア起源神話は、ギリシア人とローマ人の相互作用の中で力と意味を獲得する合作である、というのです。

以上の諸学説の問題点について、とりあえずごく簡単にコメントしておきます。

①ギリシア人説について。すでに前 4 世紀より前に南イタリアやエトルリアでアエネアスを描いた図像等が発見されており、これらの地方で、どんな形であったにせよ、アエネアスが知られていたことは紛れもない事実です。この事実を踏まえれば、ギリシア人がローマ人をトロイア人の子孫と見なすより前に、ローマ人はアエネアスの末裔と自称していた、と考える方が合理的でしょう。

②エトルスキ説について。エトルスキを小アジア出身と見なす学説は排除されます[注1]。エトルスキは前 9 世紀以降まさにイタリアの地で形成された民族で、ギリシア文化を摂取して独自の文化を発展させたのです。ホメロスの叙事詩やアエネアス伝説をイタリアに伝えたのは、前 8 世紀半ばから南イタリアやシチリアに多くの植民市を建設したギリシア人であって、例えばセゲスタはトロイア人が建てたと伝えられており、エトルスキはそれらの伝説をローマに伝える仲介役を務めたのです。

③ラテン人説について。アエネアス伝説が前 6 世紀にラティウムで形成されたとすれば、それは何故、何を基にして成立したのでしょうか。イタリアにおけるミケーネ陶器の存在は、ラティウムにおけるアエネアス伝説の成立の証拠にはなりません。また前 4 世紀末にラウィニウムにアエネアス礼拝堂が存在したからといって、前 7 世紀のラウィニウムにおける聖域の 13 基の祭壇でアエネアス崇拝が行われていたことは立証されません。前 7、6 世紀におけるラティウムとマグナ・グラエキア、シチリア、エトルスキ、ローマとの関係の検討が必要です。

④ギリシア人とローマ人の合作説について。これは両者の政治的ないし商業的接触を前提としております。ローマがギリシアと直接本格的に接触するようになったのは前 4 世紀後半からですが、すでに前 7 世紀にはエトルスキはギリシアから多大の文化的影響を受けております。アエネアス伝説も前 7 世紀までにはエトルリアに知られており、前 6 世紀後

半にはローマ・ラティウムにも伝達されたと考えられます。従って、前４世紀より前の時期に、アエネアス伝説はギリシアとローマだけでなく、エトルリアやラティウムでどう取り扱われたのか、が問われるでしょう。

以上の批判を通して、問題は次のように設定されるでしょう。

①トロイア起源に関するセゲスタ等の伝承とアエネアス伝説は、シチリアからどのようにしてエトルリアに伝播したのか。

②アエネアス伝説は何時、どんな形でラティウムに伝えられ、ラウィニウムのトロイア起源神話となったのか。

③ローマは何時、何故、どんな形でアエネアス伝説を採択し、自国のトロイア起源神話を編み出したのか。

④ローマがギリシア世界と本格的に接するようになった時､ローマのトロイア起源神話･アエネアス伝説はどのような意味を持ったのか。

⑤カエサルがアエネアスを自分のユーリウス氏の始祖と主張し、アウグストゥスがこの点を強調したのは何故か。

以上の諸問題を解明するのが本講義の目的ですが、各設問とも多くの問題を内包しているので、ここでその全てを詳論することはできません。主要な問題に限って、各地におけるアエネアス伝説の受容と展開を歴史的事実と絡めて考察しつつ、私なりの見通しを示そうとおもいます。ただし⑤は時間の関係でここでは割愛せざるをえません。

Ⅱ） エトルリアへの伝播

ギリシア人は前 750 年ころから南イタリア半島やシチリアに多数の植民市を築いており、その過程でかなり早い時期にホメロスをこれらの地方に持ち込んだことは確実です。前７世紀後半 (630 年頃) に、『オデュッセイア』に出てくる場面 — オデュッセウスが一つ目巨人キュクロープスを部下とともに襲う場面 — を画いた壺絵が、カンパニア地方のギリシア植民市で（さらにエトルリアでも）出土しているので、遅くともこの時までにホメロスの叙事詩がギリシア人植民者によってイタリアに持ち込まれたことは、疑う余地がありません。

そのような植民活動の最中に、アエネアスがイタリアに漂着したという伝説が形成された、と推定されます。前５世紀末の歴史家トゥキュディデスによれば、シチリアに住むエリュモイ人はトロイア人とシカニ人から構成され、その主要な都市はセゲスタ、ドレパヌム、エリュクスでした。セゲスタには先史時代からの居住が実証されているので、ここにギリシア人が前７世紀に植民した時、その先住民たるエリュモイ人がトロイア人の子孫と自称しているのを聞いたのでしょう（McKay)。その自称が事実かどうかは確かめようがないけれども、トロイア人がシチリアに到来したことが先住民の間に口承で伝えられてきて、前７世紀末までにギリシア人入植者によって伝承として確定された、と推定して間違

いないでしょう。そのさいギリシア人は恐らく、エリュモイ人が祖先と見なしたトロイア人と、トロイアを脱出したアエネアス一行とを結び付け、彼らがシチリアに漂着して町を建てたという伝説を生みだした、と考えられます。

ところで、ギリシア人が多くの植民市を築いた南イタリアのカンパニア地方には、すでにエトルスキが定住しており、かなりの数の都市国家を建てておりました。このカンパニア在住のエトルスキは、ギリシア文化を愛好し熱心に摂取したので、隣接するギリシア植民市からホメロスを学び知り、それを前７世紀後半までにエトルリア本土に伝えた、としても不思議ではありません (Lowenstam)。これはオデュッセウスが一つ目巨人を襲う場面を描いたエトルリア出土の壺絵 (前７世紀末) から明らかです。こうしてエトルスキは、セゲスタ等のトロイア起源説とアエネアスのシチリア到着伝説も知るようになり、トロイアを脱出するアエネアスの姿を描くようになりました。ただしこの時点で、エトルスキはアエネアスがシチリアに到来したという情報は確かに受け取ったけれども、彼がイタリア半島にまでやって来たとする伝説はまだ形成されていなかった、と推論されます。

というのは、アエネアスを描いたエトルスキの絵では、ギリシアの絵と違って、アエネアスは大抵の場合トロイアの神殿から持ち出したパラディオン（都市の護り本尊）を片手に護持した姿で描かれているからです。つまりアエネアスは新たな都市を建設すべくトロイアを脱出したばかりであって、エトルリアは無論のこと、イタリアの半島および島嶼のどこにもパラディオンを献納してないのです。そこから示唆されるのは、彼がイタリアには到着していないということです。エトルスキにとってアエネアスは、父親を背負って放浪する悲劇の主人公であり、単にこの点でのみ効果的な絵の題材として利用されたと思われます。

この点と関連して注目されるのは、トロイア戦争で活躍したアキレウスやオデュッセウス、そしてまたヘラクレスの名前が多くのエトルスキの壺や鏡に記されていて、aχile, aχle など Achileus を転写した名前は 34 例、utuse,utuste など Odysseus を転写した名前は 15 例、helecele, helcle(s) など Herakles を転写した名前は 69 例が実証されているのに対して、Aineias を転写した名前 eina は僅か１例しか実証されていないという事実です（de Simone）。これを見る限り、アエネアスは他の英雄と違って、エトルスキ人にとって日常生活にまで浸透した馴染み深い存在ではなかったと言えます。

以上の考察からエトルスキは、アエネアスがエトルリアのどこかに漂着して都市を建てた、という認識は持っていなかったと結論されます。実はすでに前７, ６世紀に全盛期を迎えたエトルリアの各都市国家は、それぞれにおける建国者を（例えばタルクイニーにおけるタルコンのように）確定していたに違いなく、すでにセゲスタ等が、また少し後にはローマが始祖と認定しているアエネアスを改めて建国の祖と想定する必要はなかったのです[注2]。

Ⅲ）ラティウムにおける受容と変容

ローマの伝承によれば、アエネアスは前 13 ないし 12 世紀に炎上するトロイアを逃れ、ラティウムに上陸してラウィニウムを建設し、彼自身もしくは息子のアスカニウスがカエレ王メゼンティウスと戦ってこれを破り、その後アスカニウスはアルバ･ロンガを建設し、その数百年後に彼の子孫ロムルスがローマの町を築いたとされます。

しかしながら考古学的発掘調査によれば、アエネアスがラティウムに到着したとされる前 13 ないし 12 世紀には､ラティウムでもエトルリアでも小規模な村落が散在するだけで、都市や王国の存在を示唆するような遺跡は発見されておりません。この時期はミケーネ文化の末期に当たり、イタリアでも数か所でこの文化に属する陶器の破片が発見されているので、当時イタリアがミケーネ文化と何らかの関係を持っていたことは確かです。ところが肝心のラティウムやローマ市ではこの種の遺物は発見されていおりません。従って遺跡や遺物によって、ミケーネ人あるいはトロイア人がイタリアましてやラティウムに定住して都市を建てたことは、立証できないのです。ただしトロイアの難民がミケーネ文化の陶器を携えてイタリアに逃れたことは、可能性としては排除されないでしょう。

一方、アエネアスの息子のアスカニウスが建てたとされるアルバ・ロンガについては、アルバ山麓に幾つかの集落の跡が発見されております。それらの集落跡のうちアルバ・ロンガの候補地として最も有力視されるのはカステル・ガンドルフォの遺跡ですが、確実に特定されたわけではありません。ともあれそれらの集落はいずれも、都市とか王国とかいった規模とはほど遠いのです。都市がイタリアで最初に出現したのは、前８世紀半ば、南イタリアおよびシチリアにギリシア人が植民市を建ててからであり、カエレを含むエトルリア各地でも都市への発展が確認できるのは前８～７世紀以降です。

他方ローマは、ロムルスが建国したとされる前８世紀半ばにはまだ村落の状態にあり、都市形成は最初のエトルスキ系の王タルクイニウス・プリスクスの治世が始まった前７世紀末のことです。続いてこれまたエトルスキ系の王セルウィウス・トゥリウスの時代（前６世紀半ば）にローマは都市国家として確立され、次の同じくエトルスキ系の王タルクイニウス・スペルブスの時代（前６世紀後半）に周辺の多くの小共同体を征服して、ラティウムにおける最大の勢力となりました。まさにこのエトルスキ系王政の時代にこそ、ギリシア文化を摂取しつつ独自の発展を遂げていたエトルスキ文化がローマに流入したのです。ですからシチリアに到着したアエネアスの伝説も、その時代に導入されたと推定されます。

前に述べたように、アエネアスがイタリア半島にやってきたという伝承はまだ形成されていなかった、少なくともエトルスキは関知していなかったのです。ではアエネアスがラティウムに漂着したという伝説は、何時、どのような事情で成立したのでしょうか。

これを解明する手掛かりは、アエネアスと戦って戦死したとされるカエレの王メゼンティウスにあります。実は、この王は実在の人物です。というのは、前７世紀に編年される

エトルスキの壺にエトルスキ語で mezenties という名前が刻まれており、これはラテン語の Mezentius に相当するからです。またリウィウス等よりも古い史料に、メゼンティウスはラティウムに侵入してこれを制圧し、初穂を要求したと記録されており、その他の点を考慮すれば、彼は前 700 年前後にラティウムの一部を一時的に支配したエトルスキの王であったと見て差し支えありません。この外国人王の侵略と強圧的支配は、歴史的事実としてラテン人の脳裏に深く刻まれたはずです。それはやがてローマにまで伝えられ記憶に留められました。

このように外国の王に侵略された記憶をもつラティウムに、エトルスキ系王政のローマからギリシア・エトルスキ文化が導入された時、セゲスタ等のトロイア起源説とアエネアス伝説も伝えられたに違いありません。ローマは前 6 世紀中頃までにセルウィウス・トゥリウス王が都市国家を確立し、次のタルクイニウス・スペルブス王はラティウムへの侵略を企てましたが、このような時、海岸の近くに位置し当時ラテン諸都市の宗教的中心地であったラウィニウムは、強大化するローマに対抗するため、ラティウムにおける自国の威信を高めその求心力を増大させる必要がありました。そのためラウィニウムは、シチリアに到着したトロイア人アエネアスがシチリアからラティウムまでやってきてラウィニウムを建設した、従って自分たちはアエネアスの子孫である、という神話を編み出したと推定されます。しかもアエネアスは女神アフロディーテー（ウェヌス）の子供と見なされているので、宗教的中心地に相応しい人物であると考えられたでしょう[注3]。

アエネアスは、その神話的出自はさておき、外国人それもトロイアの落ち武者でしたが、このことは以下のような理由で、彼を始祖と認定する障害とはならなりませんでした。即ち、ギリシア人にとってトロイア人は確かに barbaroi でしたが、この単語は前 490 年のペルシア戦争以前にはまだ単に「ギリシア語以外の言語を話す人」という意味しか持たず、この戦争以後に派生した「野蛮人」という含意はまだなかったし、ラテン人にとっては逆にギリシア人も「ラテン語を話さない人」という意味でバルバロイだったからです。ラテン人はむしろ、ギリシアの大軍を相手に 10 年間も戦ったトロイアの強盛を評価し、その第２の武勇者たるアエネアスを始祖と認めることに何のためらいも持たず、むしろそれに誇りを抱いたのでしょう。

ではなぜ他のギリシアの英雄、例えばトロイア戦争から故国に帰る途中にイタリアにも漂流したと伝えられる英雄オデュッセウス、あるいは地中海各地を放浪した超人的英雄ヘラクレスではなく、他ならぬアエネアスが始祖に選ばれたのでしょうか。ヘラクレスはなるほど超人的豪傑であり、実際に多数のギリシア都市でその創建者として崇拝されておりますが、所詮は神話上の英雄であり歴史的実在感に乏しかった。ラウィニウムとしては、史実と信じられたトロイア戦争において活躍し、戦後帰郷する途中の英雄、あるいは亡命を余儀なくされた放浪中の英雄を選考したかったのでしょう。その点でオデュッセウスは資格が十分でしたが、武勇よりは狡知な策謀で有名であったため選考から漏れ、次のような理由から、ラウィニウムはアエネアスに白羽の矢を立てたと推考されます。

先に述べた通り、前 700 年頃メゼンティウス王に蹂躙されたラティウムの住民には、その屈辱的出来事が生々しく記憶され、代々言い伝えられたに違いありません。アエネアスがラティウムに渡来してラウィニウムを建設したという神話を前 6 世紀後半に創作するさい、ラウィニウムはこのメゼンティウス王に関する史実を取り込んで、神話に歴史的真実味を加えようとしたと推論されます。凶暴なメゼンティウスと干戈を交え、これを葬り去れる勇者はアエネアスを措いて他にいなかったと感じられたでしょう。

そのさい、現在想定されるような時間的隔たり（ラティウムにアエネアス伝説が伝達された時点から数えてトロイアの滅亡は — 後の推算によれば — ざっと 600 年前、メゼンティウスの侵入は百数十年前）は、全然問題になりませんでした。というのは、当時の人々にとってトロイア戦争はそれほど大昔の話ではなく、漠然とメゼンティウスの侵入より少し前と意識されたと推定されるからです。何故なら『イリアス』や『オデュッセイア』に描かれた慣習は、ミケーネ時代ではなく実際にはホメロスと同時代、即ち早い編年に従えば前 8 世紀後半の世界で行われていたことだったからです。つまりアエネアスとメゼンティウスとの時間差は当時のラティウム人にとっては数十年にすぎなかったのです。

こうしてアエネアス（あるいは 1 世代後のアスカニウス）とメゼンティウスの一騎打のエピソードが創作されたと推定されます。以上の考察が的外れでなければ、ラウィニウムがセゲスタ等のトロイア起源説を取り込みながら、これをアエネアスによるラウィニウム建国という神話に変貌させたのは、彼のピエタス（忠義・孝行）の故というよりは、その武勇のためであったと考定されます。

Ⅳ） ローマによる採択

ラウィニウムの中心的勢力の 1 つであったアルバ･ロンガは、伝承によれば、トゥルス･ホスティリウス王の治世下（前 7 世紀半ば）のローマと争って敗れ、住民は全員ローマに移住することになったと言われます。事実、アルバ・ロンガの遺跡と推定される場所からは前 6 世紀以降の遺物は出土せず、この地が放棄されたことを裏付けております。ローマ人はアルバ・ロンガを自分たちの故地と考えていましたが、ラティウムでラウィニウムがアエネアスを祖先と見なす神話を創作した前 6 世紀後半、これに対抗すべく、彼の息子アスカニウスがアルバ・ロンガを建設し、自分たちはその子孫であるという神話を編み出したと考えられます。こうしてローマは、その歴史がラウィニウムと同じほど古いことを標榜しつつ、ラティウムに対して主導権を確保しようとしたと推測されます。もっともローマのアエネアス=アスカニウス祖先説は、この時点であくまでもラウィニウムに対抗するための神話的フィクションであり、ローマ国内ではあまり重視されませんでした。何故なら、都市ローマそのものを創建したと信じられたロムルスこそ、真の建国者と認知されていたからです。以上のような事情を斟酌すれば、アエネアスの pietas は、この時点でその伝説を採用する動機には全然なりえなかった、と論定されるでしょう。

ラティウム諸都市に対するローマの主導権は、エトルスキ系王政の崩壊（前 510 年頃）とともに崩れ、主導権を巡る両者の対立は前５世紀初頭に戦争へと発展しました。戦後ローマは、前 493 年にラティウムの諸都市 (ラテン都市) との間に対等の攻守同盟（カッシウスの条約）を締結しました。しかしローマが前４世紀初頭にエトルリア最北端の都市国家ウェイーとの戦争で勝利を収めその領土を併合すると、ラテン諸都市との対等な関係は大きく揺ぎ、ローマの優位が歴然となりました。ラテン諸都市は、圧迫し始めたローマに対抗するため、本来ラウィニウムの始祖であったアエネアスを、今や全ラティウム共通の始祖として結束を固めたでしょう。こうしてラティウム中でアエネアス崇拝が始まり、やがて参拝のための祭壇が造営されることになるのです。

前 338 年はギリシアにとってもイタリアにとっても重大な転換期でした。この年ギリシアのポリス連合軍は、カイロネイアの戦いでマケドニアに敗れ、事実上この王国の支配下に入りました。その結果、ギリシア人がバルバロイ「野蛮人」として蔑視していたマケドニア人は、もはやバルバロイではなくなりました。さらにアレクサンドロス大王の東方征伐によってギリシア文化とギリシア語が東地中海地方一帯に広まると、「ギリシア語でない言語を話す者」というバルバロイ本来の意味も、また文化的に劣る民族やポリスに対する蔑称としてのバルバロイの意味も、東地中海世界内部では妥当性を失ったでしょう。このような状況の下で、かねてからアエネアスの子孫であることを標榜していたポリスは、今や誰憚ることなくその都市のトロイア起源を公言できたでしょう。

一方イタリアにおいて、前 338 年はローマがラテン諸都市と戦って勝利した年でした。戦後ローマは各都市に自治を認めつつラティウムを併合し、それらの都市の市民をローマ国家の構成員、つまりローマ市民として編入しました。こうして市民兵を増強し国家領域を拡大したローマは、半島随一の強国にのし上がったのです。しかもカンパニア地方の一部をも含むその併合によりローマ国家は、国内にかつてのギリシア植民市をも含み込み、また他のマグナ・グラエキアの諸都市国家とも直接接することになりました。これらのポリスはもともと東方のギリシア諸ポリスが建てた植民市であり、その建設は前８世紀半ば以降ですが、その母市の市民はミケーネ時代あるいはドーリア人の侵入以来の古い歴史を持つギリシア人に他ならなかったのです。

新興勢力ローマがこのようなイタリアに定住したギリシア人に対抗あるいは懐柔するためには、自分たちも彼らと同様に古い歴史を持ち、しかもアカイア人 — これはギリシア人と考えられた — と対等に戦ったトロイアの英雄アエネアスの子孫である、という主張が役立ったに相違ありません（Galinsky）。というのは、マグナ・グラエキアのギリシア人にとって、なるほどローマ人は言語的にも文化的にもバルバロイでした。しかしこれらのギリシア人はたとえローマの圧倒的な軍事力に屈したとしても、この強国の発祥の地がかつてギリシア人に征服されたトロイアであるという点で、全く縁もゆかりもないペルシアのようなバルバロイに屈服した場合とは違って、さほどの屈辱は感じなかったでしょう。

ローマのトロイア起源説は、恐らく前５世紀中に、遅くとも前４世紀中にエトルリアに

知れ渡っておりました。このことを直接証明する史料はありません。しかし前６世紀末に中央エトルリアの大都市国家クルーシウムの王がローマを占領・支配した後、ラティウム内部にまで侵入を企てているので、ローマやラティウムに関する情報がエトルリア各地にもたらされていたことは確かでしょう。さらにまた、南エトルリアの大都市国家ヴルチで発見され、前 350 年から前 280 年の間に作成されたと考証される「フランソワの墓」の壁画が、間接的ながら、ローマとトロイアの関係を示しているのです[注4]。

Ｖ） ローマのトロイア起源説とギリシア世界

このようなローマのトロイア起源説はまた、遅くとも前３世紀初頭までに東方のギリシア世界にも知られていました。イタリア南端にあるギリシア植民市タレントゥムはローマの脅威に晒され､アドリア海に面した王国エペイロスの王ピュロスに援軍を要請しました。ピュロスは前 280 年タレントゥムの要請を受けて、大軍を率いてイタリアに侵入しローマ軍と対戦しました。この時、彼は自分をアキレウスに擬え、ローマ人をアエネアスの子孫と考えたと、ギリシアの地理学者パウサニアスが伝えております。この記事の信憑性について、一般に肯定的ですが、Erskine は疑念を呈しております。そのような疑念の根拠として彼は、パウサニアスの記事は事件からざっと 400 年後にピュロスの心中を忖度したものであって、それには史料的な裏付けがないことを挙げております。しかしピュロスの心中を忖度するに当たって、パウサニアスはそれなりの状況証拠に基づいて判断したに違いなく、このギリシアの博学者の記事を否認する必要はないでしょう。否むしろ、前３世紀初頭までにイタリア半島の大半を制圧していたローマの動向は、ヘレニズム世界でも注目され、そのトロイア起源説は、認知されたかどうかは別にして、広く知れわたっていたと考えて差し支えありません。

前 264 年、ローマとカルタゴの間に第 1 回ポエニ戦争が勃発すると、ローマはシチリアに進軍しました。シチリアのギリシア植民市シラクサは、当初カルタゴに与し反ローマ的態度を取っておりましたが、一転してローマの同盟国になりました。このように突然政策転換が行われたのは、シラクサの独裁者ヒエロンの現実政治的政策もさることながら、文化的にも言語的にも全く異質のセム系のカルタゴよりも、トロイア起源を標榜するローマの方に親近感を抱いたためではないでしょうか。何故なら、カルタゴ人はギリシア人にとっては依然としてバルバロイだったのに対して、ローマは次のような理由で単なるバルバロイではないと感じられたと推量されるからです。即ち、トロイアがあったと見なされた所に、すでに前 700 年頃にギリシアポリスとしてイリオンの町が建てられ、今やトロイアはギリシア世界の一部を成しており、そのトロイアからの出自を主張するローマは、言葉こそ異なれギリシアと共通の文化圏に属すると認識されたでしょう。

シラクサにそのようなローマに対する親近感があったかどうかは、史料的に実証されず推測の域を出ませんが、このギリシア植民市にとって、ローマがもはや単なるバルバロイ

でなかったことは、同族のよしみで有利な取り扱いをローマに願い出るポリスが、東方ギリシアにも現れたことによって間接的に立証されます。ローマは第 2 回ポエニ戦争後、本格的に東方に進出し、前 146 年までにマケドニアとギリシアを属州として支配しましたが、ギリシア諸ポリスの中にはトロイアやアエネアスと深い係わりを持つ都市がありました。例えばトロイア地方の諸都市（ランプサコス等)、あるいはアエネアスに因んだ名前をつけた都市アイネイア（図版１）がそうですが、中にはまさにローマとの同族関係を根拠にこれに特別な配慮を嘆願するポリスもあったのです。ギリシアのポリスにはもともと syngeneia という共通の祖先をもつ関係や、oikeiotes という同じ地域に住んでいる関係を論拠として２つのポリスが同盟を結ぶ慣習がありましたが、アイネイア等はトロイアやアエネアスを通してローマとの syngeneia を根拠に請願したのです。

一方ローマ側も、対外的にアエネアスとの関連性を重視した節があります。前 218 年、第２回ポエニ戦争が勃発してハンニバルがアルプスを越えてイタリアに侵入し、まずティキーヌス河の戦い、次いでトレビア河の戦い、さらにトラシメーヌス湖畔の戦いでローマ軍を連破した。この時ローマは、大災害や天変地異が発生した時よくそうしたように、シビッラの神託に伺いを立て、その神託に基づいて次のような行動をとった、とリウィウスは伝えております。即ち、シチリアのエリュクスの山で礼拝されていた、Venus Erycina（Erycina は Eryx の形容詞、「エリュクスのウェヌス」）と呼ばれる女神をローマに移管することにしたのです。シチリアはすでに第１回ポエニ戦争後ローマの属州となっていたのですが、以前エリュクスはカルタゴの支配下にあり、当地の女神ウェヌスはカルタゴ人にはアスタルテとして、ギリシア人にはアフロディーテーとして崇拝されておりました。ウェヌス即ちアフロディーテーはアエネアスの母親と伝えられており、リウィウスは当該記事でアエネアスには言及していないけれども、ウェルギリウスやオウィディウス等はそのような親子関係を強調しております。前１世紀末の詩人たちによるこのような強調は、アウグストゥスがウェヌスを尊重したことを反映している、という説に対して Erskine は、Venus Erycina のローマへの移管をむしろアエネアスと関連付けて論じており、その論拠は首肯できます。

しかし問題は、何故 Venus Erycina でなければならなかったのか、という点にあります。というのは、ローマはすでに前 270 年にウェヌスの神殿を建立しており、単にこの女神の崇拝が目的だったのなら、改めてこれを導入する必要はなかったはずだからです。私は他ならぬ Venus Erycina の移管を一種の evocatio と捉え、ローマはアエネアスとの関連性を意識してその導入を積極的に推進したと把握します。evocatio とは、ローマが征服した都市の力を殺ぐため、その都市の守護神をローマ市内に搬入し、自国の神として礼拝するため新築した神殿に安置する制度です。このような例はすでに前 391 年に見られます。この年ローマは征服したエトルスキの都市国家ウェイーからその守護神 Juno Regina「女王ユーノー」をローマ市内に搬入し、新築した神殿に安置したのです。

とはいえ、このウェイーの evocatio と今回の Venus Erycina の移管には、決定的な違い

が看取されます。というのもウェイーの場合ローマは勝利者でしたが、今回は敗者であり、しかも連戦連破を喫して未曾有の国難を迎えていたのです。従って今回の evocatio の眼目は、敵であるカルタゴの力を殺ぐだけではなく、ローマを勝利に導くことでした。この目標を達成するためには、かつてのカルタゴ領からカルタゴ人の崇拝の対象である神ないし女神をローマに導入するだけでは十分でありませんでした。それはローマ人に自信を与え、彼らに勝利をもたらすような神もしくは女神であることが必須でした。

このような条件を満たすのはVenus Erycinaを措いて他にありませんでした。というのは、それはかつてのカルタゴ領に鎮座してカルタゴ人の主要な女神アスタルテとして礼拝されており、その上ウェヌスはアエネアスの母であって、彼にトロイアの再興のために脱出するよう指令し、結局この指令が基になってローマが建国されるに至ったからです。つまりこの女神は、オリュンポスの主要な神々の中でもローマと最も深い関係を持ち、従って存亡の危機に立つローマを救うために全力を尽くしてくれると期待されたのでしょう。

恐らく以上のような思惑の下に、シビッラの神託という体裁をとって Venus Erycina の移管が決定され、実施されました。ローマは前 216 年カンナエの戦いでまたしても大敗を喫しましたが、市内に Venus Erycina の神殿が建造され落成した前 215 年以降、反撃に転じ、次第にイタリアにおける失地を回復しました。そして前 202 年のアフリカのザマの戦いで最終的な勝利を収め、カルタゴを降服に追い込みました。この時点でローマにとってそのトロイア起源説、従ってまたアエネアス伝説は、もはや単なる神話ではなくなり、ローマの最古の歴史を表す事実として対外的に喧伝されるようになったと推考されます。

Ⅵ）結論・展望

以上の考察の結果をまとめて、本講演の結びにしたいと思います。

①ホメロスの作品は遅くとも前７世紀中頃までにギリシアの植民者により南イタリアとシチリアにもたらされました。間もなくそれはカンパニアのエトルスキに伝えられ、彼らを通じてエトルリア本土にも伝播しました。他方シチリアでは、前 700 年頃ギリシア人が植民した時、セゲスタ、エリュクス等の先住民エリュモイ人がトロイア人の子孫と自称しているのを耳にしました。ギリシア人はその伝承を、トロイアから逃れたアエネアスと結び付けて、先住民をアエネアスの子孫と見なす神話も創作したと考えられます。これらの伝承・神話も前６世紀前半にエトルリアに導入されました。ただしこの時点で、アエネアスがイタリア半島に到達したという伝説は、まだ形成されていなかったと考えられます。

②前７世紀末からエトルスキ系王政の下でエトルスキの影響を受けていたローマに、ホメロスとともにそれらの神話・伝説も伝えられました。前６世紀中頃ローマのラティウム進出に伴い、ここにもそれらの神話・伝説が導入されました。当時ラテン諸国の宗教的中心地であったラウィニウムは、ローマに対抗するため、アエネアスはラティウム沿岸に上陸してラウィニウムを建設しという神話を創作し、この神話をエトルスキのメゼンティウ

ス王によるラティウム侵攻という史実と結び付けて真実性を高めようとしました。

③これに対抗してローマは、アエネアスの死後その息子アスカニウスがアルバ・ロンガの町を建て王として統治し、すでにその建国者と認定していたロムルスの祖先は、アルバ・ロンガのアスカニウス、従ってアエネアスに遡るという神話を編み出した、と考えられます。王政崩壊の数十年後、ローマはラティウムとの戦争の結果結ばれたカッシウスの条約でラテン諸国と対等の立場に立ちましたが、前 4 世紀初頭ウェイーとの戦いに勝利すると、この対等の立場は崩れローマが優位に立ちました。ラティウムはローマの圧力に対抗するため、全体としてアエネアス崇拝を行い結束を固めました。ローマは前 338 年のラテン戦争で勝利しラテテン諸都市を併合すると、アエネアス伝説をラティウムと共有し、ローマのトロイア起源神話がこの地方全体に受け入れられ、アエネアス礼拝堂が造営されました。その神話は諸外国にも喧伝され、エトルリアにも広まりました。

④その後ローマはマグナ・グラエキアに進出し、当地のギリシア植民市を同盟国にしていきますが、その過程でローマのトロイア起源説は、自国の古い起源を誇示する格好の説話となりました。前 218 年に勃発した第 2 回ポエニ戦争で連戦連敗を喫したローマは、シチリアのかつてカルタゴ領だったエリュクスから「エリュクスのウェヌス」を移管し、その神殿が落成した前 215 年以降ハンニバルに対し反撃に転じました。カルタゴに対する最終的な勝利によって、ローマのトロイア＝アエネアス起源説は単なる神話･伝説ではなく、殆ど史実と目されるに至りました。前 200 年以降の東方ギリシア諸国への進出にさいして、ローマのトロイア起源説は同じ起源を主張するギリシアの諸都市に、ローマによる有利な取り扱いを期待する口実となりました。

⑤その後アエネアス伝説がどう展開したのか、以下で簡単に展望しておきます。

ユーリウス・カエサルはユーリウス氏がアエネアスの息子ユールスに遡ることを強調しました。このユーリウス氏の神話的系譜は、元首政を確立した彼の養子アウグストゥスに受け継がれました。伝統的な家の再構築を目論んだアウグストゥスにとって、ユーリウス氏がアエネアスに遡るという神話は非常に好都合でした。アエネアスが体現した例の pietas の概念は、まさにうってつけの徳目でした。アウグストゥスは建造させた「平和の祭壇」に自分の家族とともにアエネアスの像をも刻ませ、ユーリウス氏の神話的家系を誇示しましたが、他方、アウグストゥスの元首政体制を称賛するウェルギリウスは、アエネアスの冒険を物語る叙事詩『アエネイス』の中で、このトロイアの英雄を “pius Aeneas” と呼び慣わし、その pietas（pius はその形容詞）を強調したのです。

注

1）もしエトルスキが小アジアで学び知ったホメロスの叙事詩をエトルリアにもたらしたのなら、彼らの同地方への到着は、ホメロスがその作品を完成させた年代以降ということになる。『イリアス』の作成は一般に前 750 年頃、『オデュッセイア』はその 2,30 年後と考えられている、ただし前 660 年頃に編年する説（Schrott）もある。しかしながら、前 8 世紀であれ 7 世紀であれ、エトルリアには外国からの大量移民を示唆する物的証拠は何も残っていない。なるほど前

７世紀前半には東方化様式の物が発見されており、オリエントからエトルスキがエトルリアに移民した証拠と考えられた。しかし東方化様式は、実はギリシアでも見られ、オリエントの影響を受けて開花した芸術様式に他ならない。

またエトルスキをトロイア人と見なすサフローノフ（Сафронов）の説は、次のようなゲオルギエフの仮説に基づく。即ち、ラテン語 E-trus-ci の語幹 trus はそのギリシア語の名称である Tyrs-enoi の語幹と同じであると仮定した上で、両者とも Troia の原形である *Trosia に遡り、従って Etrusci は Troia からイタリアに渡来したと推測するものである。しかし Etrusci が Troia と同一の語幹を有することは実証されない仮説に過ぎない。仮にそうだとしても名前の一致だけをもって両者を同一民族と見なすには、様々な難点が生じる (平田『エトルスキ国制の研究』)。

２）ガリンスキー（Galinsky）は若干の南エトルリアの都市、特にヴルチがアエネアスを建都の英雄と考えたと想定しているが、確実な証拠はない。

３）ソルディ (Sordi) は、まさにローマが前 4 世紀にアエネアスをローマにもたらしたと主張するが、この説は受け入れられない。

４）この墓の３面の壁に描かれ壁画は、次の２つの部分から構成されている。①トロイア戦争中にアキレウスがトロイアの若者たちを殺害する場面、②計 12 人の戦士がそれぞれ２人ずつ組になり、一方が他方を襲撃している場面である。アキレウスによる殺戮場面を表す絵は他にも数例あるが、「フランソワの墓」の壁画では、これらと違って、①の場面が以下で説明する通り歴史的事実を描いたと考えられる②の場面と並列されている。この独自性に鑑み、①と②は互いに密接な関連を持つ場面として描かれたと考えて間違いない。

さて、②の６組の戦士にはそれぞれ本人の名前と、たいていの場合その出身地名が記されており、それによってこの壁画が、ローマをも巻き込んだエトルリア諸都市国家間の紛争に関する史実を描いたことが判明する。２人ずつのペアの中に、(a) cneue tarχunies rumaχ がまさに殺されようとしている場面と、(b) macstrna が囚われた戦友を救出しつつある場面がある。(a) の cneue tarχunies rumaχ はラテン語に直せば Gnaeus Tarquinius Romanus で、この「ローマ人」Tarquinius は、ローマを統治したエトルスキ系の王 Tarquinius と同じ氏族名を付けており、明らかにこの王族の一員であった。一方（b）の macstrna は、ローマ皇帝クラウディウスがローマ王セルウィウス・トゥリウスのエトルスキ名として挙げた Mastarna と同じ名前である。このマスタルナは第 4 代ローマ皇帝クラウディウスによれば、軍隊を率いてローマ市を占領し、タルクイニウス・プリスクスの後にその王になった軍司令官だった。クラウディウス帝の記述を援用しつつ、(a) と (b) を解釈すれば、(a) はローマ王族タルクィニウス氏の一員が殺害されたという事実、(b) はヴルチの武将マスタルナが戦友を救出している事実を描写しており、その後マスタルナはローマを占領し、セルウィウス・トゥリウスとしてこの都市を支配することになる。

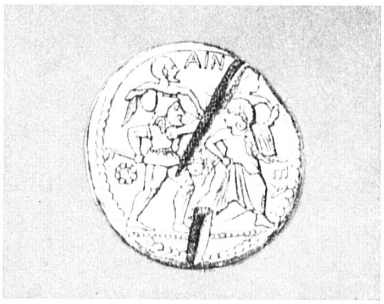
先に考察したように、①と②の壁画が関連しているならば、①におけるアキレウスとトロイアの若者は、それぞれ②におけるマスタルナとタルクィニウスに対応することになる。従ってトロイアを攻めた立役者アキレウスはローマを攻略したマスタルナと対比され、そして殺戮されるトロイアの若者はローマ王族の一員タルクィニウスと対比されるので、ローマ人はまさにトロイアの末裔として位置づけられているのである。とすればローマがトロイアに起源を持つという主張は、すでにエトルリア中に流布していたと考えられる。ヴルチはその主張を逆手にとって、かつて自国の英雄マスタルナがローマを征服し、セルウィウス・トゥリウスという名前で王としてそれを支配した、昔日の栄光を墓の中に秘かに描き出したのである。

主要参考文献

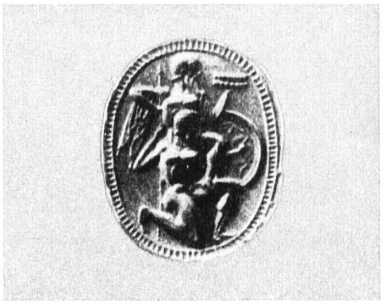
ウェルギリウス著、呉茂一訳『アエネイス』
岡道夫『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社、1988 年
小川正廣『ウェルギリウス研究　ローマ人の詩創造』京都大学出版会　1994 年
平田隆一『エトルスキ国制の研究』南窓社　1982 年
村田治『トロイア戦争全史』講談社　2008 年

A. Alföldi, *Die trojanische Urahnen der Römer*, Basel 1957.
R.Bömer, *Rom und Troia. Untersuchungen zur Frühgeschichte Roms,* Badenbaden 1951.
F. Coarelli, M. Torelli, *Sicilia,* 2000[5].
T.J. Dunbabin, *The Western Greeks. The History of Sicily and South Italy from the Foundation of the Greek Colonies to 480 B.C.,* Oxford 1999.
A. Erskine, *Troy between Greece and Rome. Local Tradition and Imperial Power,* Oxford 2003.
Enciclopedia Virgiliana, I － IV, Roma 1984-88.
Alba Longa (G. D'Anna), I, p.77-80.
Ascanio (E. Flores), I., p.363-366.
Enea (R. Grimal / F. Carrevani), II, 221-236.
Lavinio (F. Castagnoli), III, p. 149-153.
Mezenzio (A. La Penna), III, p. 510-515.
Pietas (A. Traina), IV, p.93-101.
Enea nel Lazio. Archeologia e mito, Bimillenario Virgiliano : Roma 22 Settembre -31 Dicembre 1981.
La leggenda di Enea nel Lazio
La leggenda di Enea nel Lazio e l'Eneide di Virgilio
Origini della leggenda di Enea
G.K. Galinsky, *Aeneas, Sicily and Rome,* Princeton 1969.
J. Latacz, *Troia und Homer. Der Weg zur Lösung eines alten Rätzels,* 5. aktualisierte und erweiterte Aufgabe, 2005.
S. Lowenstam, *As Witnessed by Images. The Trojan War Tradition in Greek and Etruscan Art*, Baltimore 2008.
A.G. MacKay, *Vergil's Italy,* Somerset 1971.
J. Perret, *Virgile,* Paris 1967.
G. Pottino, *Cartaginesi in Sicilia,* Palermo 1976.
R. Schrott, *Homers Heimat. Der Kampf um Troia und seine realen Hintergründe,* München 2008.
H.J. Schweizer, *Vergil und Italien. Interpretation zu den italischen Gestalten des Aeneis,* Aarau 1967.
C. de Simone, *Die griechischen Entlehnungen im Etruskischen,I-II,* Wiesbaden 1968.
M. Sordi, *Il mito troiano e l'eredità etrusca di Roma,* Milano 1989.
Ch. Ulf (hrsg.), *Der neue Streit um Troia. Eine Bilanz,* München 2004[2].
T.P. Weiseman, *The Myth of Rome,* Exeter 2004.
S.Woodford, *Images of Myths in Classical Antiquity,* Cambridge 2003.
Л.А. Гиндин, В.Л. Цымбурский, *Гомер и история восточного средиземноморья,* Москва 1996.
А.В. Сафронов, 'Воина под Троей', in : *Классическая филология на современном этапе,* Москва 1996, 141-159.

1



2



3

4

1. Münze aus Aineia, 6. Jh. 2. Etruskische Gemme, 6. Jh. 3. Terrakotta aus Veji, 6. Jh.
4. Vase aus Vulci, vor 500

(Bömer, *Rom und Troia*)

(MacKay, *Virgil's Italy*)

CENTRAL AND SOUTHERN ITALY

CORTONA
L. TRASIMENUS
PERUSIA
CLUSIUM
UMBRIA
AMERIA
VOLSINII
ETRURIA
AMITERNUM
TARQUINII
FALERII
GRAVISCA
TIBERIS FL.
VEII
ALBA FUCENS
CORFINIUM
SULMO
PYRGI
CAERE
TIBUR
SAGRUS FL.
LARINUM
ROMA
PRAENESTE
OSTIA
VELITRAE
ANAGNIA
SAMNIUM
LAVINIUM
CORA
TRERUS FL.
ARPINUM
ARDEA
ATINA
LATIUM
LIRIS FL.
PRIVERNUM
CASINUM
ANTIUM
RUFRAE
TARRACINA
TEANUM SIDICINUM
FORMIAE
MINTURNAE
CIRCEII
CAIETA
SUESSA AUR.
BENEVENTUM
CALES
Sinuessa
CALOR FL.
VOLTURNUS FL.
CAMPANIA
CAPUA
VOLTURNUM
ACERRAE
ABELLA
L. AMSANCTI
LITERNUM
PONTIAE
ATELLA
NOLA
PUTEOLI
NEAPOLIS
MT. VESUVIUS
CUMAE
MISENUM
HERCULANEUM
POMPEII
AENARIA
STABIAE
SALERNUM
SURRENTUM
SILARUS FL.
CAPREAE
PAESTUM

LIPARI
Aegatian Islands
MT. ERYX
PANORMUS
ZANCLE-MESSANA
DREPANUM
SEGESTA
HIMERA
CEPHALOEDIUM
TYNDARIS
RHEGIUM
CARONIE MTS.
NAXOS
LILYBAEUM
HALICYAE
SICILIA
MT. ETNA
SELINUS
CENTURIPA
ENNA
CATANA
MORGANTINA
HERACLEA MINOA
ACRAGAS
LEONTINI
MEGARA
PHINTIAS
GELA
SYRACUSE
ACRAE
CAMARINA